

循環利用研究と産学官連携

研究管理官 山本 幸一

平成16年の4月から循環利用の研究分野と産学官連携を担当しています。ここで言う循環とは、リサイクルを含む木材資源の循環的な利用を指していますが、将来的には、森林を育てる、林産物を利用する、そしてその利益を森林に還元するという循環にならなければいけないと思っています。そのため、研究管理官のポストに就いてからは、自分の研究分野とは直接関係ないと思っていた林道づくり、間伐作業、集材作業などを出来るだけ自分の目で見えるようにしています。山の作業を見てまず感じたことは、木を伐採して山から運び出すことは大変なことだと言うことでした。すなわち、海外からの安い木材に対して、低コストで木材を生産することは容易ではないことです。しかし、一方で森林施業の環境を整えさえすれば、森林は人々が働く場所としては、誇りある素晴らしい所だと直感しました。この二点を、どの様にして達成するかが今、日本の森林・林業・木材産業に求められているポイントであると思っています。



蛇足ですが、入省した年、林野庁の研究普及課で行政研修を受けていたときに先輩から頂いた単行本「森林の思考・砂漠の思考：鈴木秀夫（昭和53年）」には、次の様なことが書いてありました。それによると、森林で生まれた考え方は循環的であり、砂漠的で生まれた考え方は一方向的であり、対照を成すようです。近頃、ゆっくりと日本の森林を見てみると、氷河期以降、森に接して暮らしていた人達が循環的な考えを持つに至ったのは最もだと思えてきます。

次に、産学官連携の担当者としての課題です。平成17年6月25～26日に第4回産学官連携推進会議が内閣府や総務省等の主催により京都国際会館で行われ参加しました。棚橋科学技術政策担当大臣や尾身元担当大臣、6名の総合科学技術会議議員が2日間にわたって出席されており、日本の科学技術政策推進の根幹と位置付けられる会議でした。産学官の連携は、科学技術創造立国を目差す日本にとって、それを実現する重要な手段として位置付けられています。会議の内容を自分なりに纏めると、（１）相互理解：お互いの溝（それぞれが望むことのミスマッチ）を埋める、（２）人材育成：知的財産に係わる12万人の人材育成、二つの専門をこなせる人材の育成、博士1万人計画で誕生した人材の活用、（３）クラスター：地域の力と資源を引き出すためのまとまりを持った集団活動の推進、の3点になります。これを森林総合研究所の仕事に照らしてみると、（１）社会が何を必要としているかをよく知る、（２）複合的な専門性を持った職員を増やす、（３）各地域において、他分野と連携しつつ、森林の育成や利用についての仕事を進める、となると思います。循環利用と産学官連携に関して、以上2つの方向性を持って仕事を進めて行きたいと思っています。